

---

# 雪夜

SUPY

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪夜

### 【Nコード】

N9276C

### 【作者名】

SUPY

### 【あらすじ】

一人の探偵がぶらりと寄った山奥の旅館。朝起きると男が一人死んでいると云う

弱ったなあとばかりと煙を吐いた。昇る煙を目で追いかけてもうひとつ弱ったなあと頭を掻いた。最近風呂で頭を洗うのをさぼったせいか少々ふけが飛んでこれにも多いに弱った。

そうしてまわりでは大の大人が雁首を並べておれが喋り出すのを今か今かと待っている。そんなに沢山の目玉で見られる事には慣れて居ないものだから尻の下が痒くなった

向かいに座っているじいさんはこつくりこつくり船を漕いでいて、人の気も知らずに呑気なものだ。こんな田舎に来るんじゃないかと大変後悔した。

それでいて動くに動けず喋るに喋れぬ。全く似て弱った。

おれは学問は嫌いだったから学はない。学は無いが、こじんまりとした探偵事務所を持っている。大して繁盛しているわけでもなかったがどうにかして食っていける分は稼いでいた。それでも盆正月は実家に帰らずに働いていたら、大家がやって来て、田舎に少し骨休めにでも行ったらどうかと勧めてきた。静かで温泉のある良い旅館を知っているからあははと云って、おれはその旅館というのは何処ら辺にあるかと聞いたら全くの雪国だった。

おれは雪が大嫌いだ。冷たくってなんにも楽しいこともないし、何より不便だ。そう云っておれは最初断ったが、大家曰く温泉に浸ければ雪もそう悪いものではないからのんびりしてくるといいと云う。働き詰めだったからたまにはそんなのもよかろうとさっそく昨日やって来た。

電車に揺られて着いてみるとやっぱり雪国だ。あちこちが真っ白でなにも面白くない。宿の者が迎えに来ていたから迷わず旅館に向かった。こんな田舎では他に見るところもなかるう。

旅館は古くってなかなか趣があるが、とんだ山奥だ。猿が温泉に

浸かりに來ると聞いたがもつともだと思つた。ここまで秘境だと猪や狸が手拭を頭に掛けて湯に浸かつていても驚かぬであらう。おれは眞つ直ぐに温泉に入つてそれから酒を飲んでごろんと布団に横になつて寝た。猿はいなかつた。

湯に浸ければ雪も良い物だと大家は云つていたがそう良い物でもなかつた。肩まで浸かり温まつたと思つて立ち上がる。すると雪が肌にひつついて途端に寒くなる。だからまたどぶんと湯に潜る。ずつとそうしていたから頭がくらくらした。

目が覚めるとばたばたと五月蠅いからなんだろうと思つて朝飯を持つてきた仲居を掴まえたら、脱衣所で男が殺されていたそうだ。おれが警察は來たのかと聞いたら雪がひどくてまだ來れそうも無いと云つた。悪いのは全部雪なんだろうが、こんな警察も動けぬ程の雪の降る地域の山奥に旅館を建てれば何かと不便なことは少しは予想できそうなものだ。もし次に建てるときは駅の隣りに建てるがよからうと云つてやつた。つてやつた。仲居は町中では風情がないと云つて何処かへ行つてしまった。朝飯は精進料理かと見紛う程に不味いから少し食つて後は残した。

朝飯を下げに來た仲居から警察が来るまでみんなで大広間に集まつた方がよからうと云うことで客も仲居も全部広間に集まつているから、お客さんも着て下さいましと云われた。そうして朝飯がやたらと残っているものだから、お口に合いませんかと聞いてきた。おれは何も云わなかつた。

煙草をぶかぶかしてから広間に向かつた。

広間には十七八人程がいておれは隅の椅子にどしんと腰掛けた。

女将がおれに近付いて今回はご迷惑を御かけしまして云々と云うからおれは何かまわん、とんだ災難だなと答えた。

ついでいつもの癖で名刺を出してしまつた。今思えば何でわざわざ名刺等持つて來たのだらうかと甚だ後悔した。女将は細い指で名刺を受け取ると額面を見て、まあと声をあげた。こんな田舎では探偵業も珍しいのだらうと少し商売つ氣が出て、何かありましたらどう

ぞ御声をかけなすつて下さいと云つておいた。そうしておれは隅でぶかぶかしていたが女将はおれの名刺を仲居達に見せびらかしていた。

おれは今の今まで探偵なんていうものは当人が知られたくないものをわざわざ掘り当てる、こそこそしたようなものだと思つていた。実際におれがやってきたのも浮気調査や素行調査のような他人の秘密を暴くのが主で、堂々と世に顔向けできるような事ではないと思つている。

他人の尻の穴に毛が何本生えていようがおれはほとんど気にならないが、他人の尻の毛の具合を知らねば済まぬ物好きもいる。そういう輩を相手にしていたから、あいつの尻には毛がいく程かと聞かれればおれは調べた。ところが今では探偵というものはなかなか勝手が変わってきたようだ。

女将はおれを呼ぶと真ん中にでんと構えたテーブルの上座に座らせてこんな事を言い出した。

「先生、私推理物の小説はよく読むんですけれど探偵つて云うのはこんな時犯人を突き当てるのが仕事なんでございましょう」

女将はおれに犯人を捕まえてくれと、そういうのだ。そんなものは本の中か漫画の話であろう。そんなものと一緒にされては全く迷惑被る話だ。しかしここににいる者は全員田舎者なのか全く要領を得ない。是非先生先生と云つて手を合わせている。おれは医者でもなければ教師でもない。先生なんてまっぴらごめんだ。まるで酔狂の極みだが、本人達はまことにもつて本気なものだから弱つてしまつた。

そもそも昨日男を殴つたのはこのおれなのだ。おれは酒には強い方だが、昨日は風呂に長く入り過ぎたから早い時間から良い心持ちになった。そうして千鳥足で一升瓶を抱えたままふらふらと温泉に行つてみた。猿がいれば一緒に酒を飲もうと思つたのだ。脱衣所には一人の男が服を脱いでいる所であつた。おれはどういうわけか一升瓶で男を後ろから殴つた。何故殴つたかと聞かれてもさっぱ

りわからぬが、確かに殴った。男はどさりと倒れたのでおれは部屋に戻ってそのまま寝た。

そんなわけだからおれは犯人を知っている。知ってはいるが云うわけにはいかぬ。まわりでは先生先生と囃立てる。

おれは全く弱ったなと思いながらぶかぶかと天井を眺めている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9276c/>

---

雪夜

2010年10月17日13時40分発行